

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25760012

研究課題名(和文)近代日本における人形創作とジェンダー

研究課題名(英文)Creation of Dolls and Gender in Modern Japan

研究代表者

吉良 智子(KIRA, Tomoko)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・人文社会科学研究科特別研究員

研究者番号：40450796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ジェンダーの視点から近代日本の女性の作り手と人形について、考察したものである。特に、近代化における人形のジェンダー化に着目し、女性の作り手が「美術/芸術」から排除されていく過程および人形創作活動と女性性について検討した。その結果、次の点が明らかとなった。第一に、人形は近代におけるジェンダー化によって、「美術/芸術」から除外されただけでなく、続く1930年代における人形の再ジェンダー化によって、男性の作り手の多い創作人形は芸術化される一方女性の作り手の多かったフランス人形はアマチュア化された。第二に、フランス人形は作り手の女性の女性性を担保する機能を保持していたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study examined the women who made dolls of modern Japan from the perspective of gender. Especially, I paid my attention to the genderization of dolls, and I inspected the process of excluding women who made dolls from modern art and the relations between the making of dolls and their femininity. Primarily, I revealed that by the genderization of dolls, these were excluded from art. However, for re-genderization of dolls in the 1930's a Sosaku-Ningyo(dolls made by doll artists) by male artists was included of art, on the other hand, a Furansu-Ningyo(dolls made from cloth) by women were not included from art. Second, I clarified that a furansu-ningyo certified the women who make it have femininity.

研究分野：近代日本美術史、ジェンダー論

キーワード：人形 ジェンダー 美術 表象 女性 表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の背景

これまでの女性の作り手に関する研究は、ごく限定的なものであった。研究の対象とされるのは、すでに評価の定まった、人気の高い一部の女性が中心であった。

これに対してジェンダーの視点を持つ美術史研究は、近代「美術」の制度の内側に女性美術家の作品や活動を位置付けようとするのではなく、彼女たちの手になる作品の分析を通じて、「美術」の制度、およびそれを組み込んだ社会のジェンダー編成を解明するという新たな段階へ進みつつある。

これらの研究は一定の成果を挙げたが、研究対象とされてきたのは、「美術」の範疇に存在する女性美術家だった。しかし、近代に制度化された「美術」はそもそも女性の作り手を周縁化することで成立したことがわかっている。

(2) 研究の動機

このような現状に対し、本研究では対象を広く「女性の作り手」とし、特に人形創作にかかわった女性の作り手に着目した。

人形創作は「女性の文化」として市井の女性に広まり、その中から誕生したプロの女性人形作家らも、女性美術家と同様に女性だけの団体をつくり、戦時体制へとかわっていったことがわかっている。

つまり女性の作り手を広くとらえてはじめて戦時文化における女性の参画や近代国家との関係性が総合的にみえる。

このように、従来の研究が規定してきた狭義の「美術」以外の領域における女性の作り手を広く視野に入れなければ、近代におけるさまざまな階層の女性の文化創造活動や主体形成の問題をさぐることはできない。

2. 研究の目的

人形創作は主に民俗学のなかにおいて語られ、美術史の対象として研究されることはなかった。

そこで近代において人形が「美術」から排除され、かつ「女性にふさわしいもの」とみなされた過程に着目し、それに抗う形で人形の「美術化」を志向した運動が女性に与えた影響、および戦時文化と人形の関わりを考察する。

全体として、近代における女性の作り手、特に人形創作にかかわった女性たちの創造活動を明らかにすることを通して、政治的・社会的活動において重要な機能を果たしながらも、可視化されにくい文化とジェンダーの問題について、今日的な問題も考慮に入れながら再考する。

3. 研究の方法

本研究では、資料調査の時代的範囲は、女性に対する教育が制度的に整う 1900 年前後から 1950 年代までとする。調査対象は、人

形作家を中心に比較として日本画家および洋画家に関する研究を参照する。

近代と現代とは、歴史的・文化的に継続するという視点を重視し、女性の作り手とその作品、およびそれらに対する評価の言説も検討したいと考えている。

資料収集および考察は以下のような 3 つの視座を設定して行なう。

(1) 人形を中心に制度に関する調査・分析を進める。

特に、人形の近代「美術」からの排除/参入による「美術」の再編成に留意しながら、人形職人/人形作家の分離、アーティストとしての近代的人形作家養成制度の構築、人形制作教育におけるカリキュラムの実態、団体展および展覧会の開催状況、一般女性向けの人形創作講座についての考察などを行なう。

(2) 従来の評価や著名度にかかわらず、各時代を特徴づける活動を行ない、作品を残した女性の作り手の作品や関連資料を収集して、女性の私的・公的空間における創作活動が、認知・評価に到るまでのプロセスを明らかにする。

また、一般女性の関わった人形に関する諸活動、とりわけ一般女性が人形を通じて戦争と濃密な関係を結んだ活動(慰問袋用の人形創作活動、女性らの創作した人形を使用した大陸における宣撫計画など)に着目し、あらゆる階層の女性らが、人形を通じて、社会的な認知を獲得していったさまを浮かび上がらせる。

さらに今日における人形そのものや人形作家への関心の高まりについても、近代における人形文化の政治性との連関を意識しながら、分析を行なう。

一方、活動が中断や断絶を余儀なくされるケースや、存在と作品が忘却に到る経緯や理由についても検討する。特に戦時体制への参画など、社会的要因が女性の作り手の創造と表現に何をもたらしたのかを具体的に検討する。

(3) 検討の必要な作品を選び出し、図像的源泉を探り、作品の制作や受容に女性の作り手、モデル、女性観賞者、批評家などがどのようにかかわったのかを、関連する文書・文献資料の解読を進めながら考証する。

4. 研究成果

本研究における研究成果は以下の通りである。

(1) 今日、「人形」は、主に女兒向けの「玩具」として認識されることが多いが、前近代においては、菊人形や祭礼用の人形など必ずしも女兒向けとして特殊化されたものではなかった。

人形は、明治以降の近代的な教育制度や教

育観の普及とともに、幼児教育という視点から論じられる傾向が強くなったことが先行研究で論じられているが、一方で、美術の制度という側面から見れば、人形は分業体制などの制作工程が「近代的芸術家像」と一致せず、職人的な「伝統工芸」という位置づけをされ、「美術/芸術」の枠組みから外された。

つまり、ジェンダー規範の確立により、さまざまな種類の人形が存在するにもかかわらず、人形というカテゴリーそのものが、「女児文化」や家庭内装飾品としての「手芸」、すなわち「人形のジェンダー化」が浸透した結果、人形は「美術」はおろか「工芸」とも見做されず、昭和になるまで官展に参入できなかった遠因のひとつとなっていたことが明らかになった。

(2) 近代化(ジェンダー化)によるこのような枠組みの再転換が、一九二〇年代末に始まる「人形芸術運動」によって行なわれた。芸術としての人形の地位獲得を目指した人形師とコレクターによって始まった人形芸術運動は、数々の研究団体や同人展の開催、人形師とアマチュア作家の技術的交流などを経て、一九三六年の官展進出によりその目的を果たした。

この運動は、人形に対する社会的な関心の高まりのほかに、当時女性の間で流行していたフランス人形制作の意欲を巻き込みながら展開したことが先行研究で指摘されている。

しかしながら、フランス人形は人形芸術運動においては、作り手のすそ野の広さや流行の熱気が一方的に利用されたことが明らかとなった。

つまり、最終的には人形のうち近代的美術の論理の沿う「創作人形」が「芸術/美術」に「格上げ」される一方で、近代における人形の「女性性」を、引き受けさせられたのである。

また女性性を帯びたフランス人形は、「手芸」の一環として認知された。さらにフランス人形は、それに携わる女性に実質的な経済的利益をもたらした。

しかしそれは社会的には「創作の結果の範囲内」として受け止められた。最も重要だったのは、フランス人形の創作が作り手の女性、すなわちブルジョワ階級の女性の地位を保証するということが明らかとなった。

(3) 近代日本における「少女」と「人形」をめぐるジェンダー・アイデンティティの問題を検討した。特に、「少女」の誕生や定義を前提に、「少女」というカテゴリーの形成と近代における「人形」文化との相関関係を追いつながりながら、戦時期に、「少女」が「人形」の創造と贈答という行為を通じて、「少女」の価値を保持していた可能性について検討した。

「少女」というカテゴリーが、近代に誕生

したことは、すでに多くの研究によって明らかにされている。

一方「少女」の誕生以降、「少女」は「人形」の制作を通じて、その価値を維持していたことが明らかとなった。

特に、戦時期における「少女」は、「センチメンタル」という言葉で、苛烈なバッシングを経験し、新しく創造された健康的で科学的な「日本の少女」へと展開したことが先行研究で指摘されている。つまり、戦争を遂行するという現実面としては「センチメンタル」な少女の価値は有効ではなかった。

しかし、戦争をめぐるジェンダー・システム(「戦う男」と「無力な女」)の維持という建前においては、「センチメンタル」であることもまた重要だった。

人形を「つくる」だけではなく、さらに「おくる」という行為、つまり現実的な戦時労働に励む「日本の少女」ではなく、従来の「少女」の価値をむしろ強化することを通じ、戦時文化の一翼に連なることによって、従来の「少女」の価値の下落を防ぎ、保持していたといえる。

すなわち、従来の「少女」が「日本の少女」に取って代わられたのではなく、戦争のジェンダー・システムの中で、どちらもその場に応じて使い分けられ、共存していた可能性が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

吉良智子、「シンポジウム報告 近現代日本における「人形/ヒトガタ」とジェンダー」、『美術運動史』、査読無、148号、2015年4月、12-16頁

吉良智子、「人形とつくること、おくること 近代日本における「少女」と「人形」」、『千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト研究 歴史=表象の現在』、査読無、294号、2015年2月、154-162頁

吉良智子、「研究ノート 近代日本における「人形」の再編成とジェンダー 「フランス人形」を中心に」、『千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト研究 歴史=表象の現在』、査読無、279号、2014年2月、148-155頁

[学会発表](計 1 件)

吉良智子、「近現代日本における女性の作り手と「人形」 ジェンダーの視点からのマッピングを通して」、『イメージ&ジェンダー研究会ミニシンポジウム「近現代日本における「人形/ヒトガタ」とジェンダー」』、2015年1月12日、「お茶の水女子大学(東京都文京区)」

6 . 研究組織

(1)研究代表者

吉良 智子 (KIRA, Tomoko)

千葉大学大学院人文社会科学研究科・

人文社会科学研究科特別研究員

研究者番号：40450796